

そもそも静雄は切れやすいし、考えるより行動する傾向にある。

「もっとわかりやすく忠告しろ」

「したつもりなんだけどね。恋をした君が暴走すれば、言葉よりも体でその事実を示すだろうって予測するのは至極当然だよ。そしてこうして現実になったわけだしね」

軽く息を吐き、新羅は鞆を探る。そうして、丸いプラスチックケース——おそらくは軟膏の類と思われる——を静雄に手渡した。

「とりあえず傷ついてたらこれ使いなよ。あと、君に通用するような毒薬はないよ。あつても私の手元には存在しないし、取り寄せる予定も今はない」

つまり死んで詫びることはできないらしい。うなだれるしかなかった。

「帝人君もそんなの望まないだろうしね。セルティも君が死んだら悲しむだろうしさ。だから私は君の自殺補助はしない」

おそらく理由としては二番目が最大にして最強だろう。新羅はそういう男だ。

「骨折とかはさせてないって言い切れるかい？」

「たぶんな」

力量の差が圧倒的すぎて、帝人の抵抗など静雄にとつてはないも同然だった。なので腕や足を折る必要はなく、押さえつけたことで痕にはなっても大怪我まではさせていないはずだ。

「とりあえずはその言葉を信じるよ。何かあったらまた僕を呼ぶか、来られるようなら帝人君に来るように伝えてくれるかな。じゃあ僕は帰るから」

「もう帰るのか？」

「だって僕がいる必要ないだろ。君は五体満足だし、帝人君の診療はさせたくないみたいだし、薬は渡したし」

その通りだが、新羅が帰れば帝人と二人きりになってしまう。そうなったとして、また自分が暴走したらどうすればいいのか。自分は自分を止める術を持たないし、帝人だって同じだろう。

残酷なことをしたとは思う。けれど後悔ができない自分と二人きり、という状況は、帝人にとつてはかなり過酷ではなからうか。

「もう少しいてくれ」

立ち上がり、玄関まで向かった新羅に言うと、はあ、と大きなため息をつく。

「……あのさ、静雄。僕はね、馬に蹴られる趣味はないんだ。ないけど、一刻も早くセルティとの時間を満喫したいから教えてあげるよ」

何を教えるというのか。きょんとしつ新羅の言葉等待った。

「君がその気持ちに気づいたきつかけは、君がついっかかり帝人君にキスしたからだよね？」

恋心を押さえる薬を相談した際にそのあたりはすべて洗いざらい話していて、その言葉は事実だったので頷く。